

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3370500344		
法人名	医療法人社団 きのこ会		
事業所名	グループホーム ローゴム		
所在地	岡山県笠岡市東大戸2712-3		
自己評価作成日	平成28年3月10日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/33/index.php?action_kouhyou_detail_2015_022_kani=true&JigyosyoCd=3370500344-00&PrefCd=33&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ライフサポート
所在地	岡山県岡山市北区南方2丁目13-1 県総合福祉・ボランティア・NPO会館
訪問調査日	平成28年3月18日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・ピック病専門のグループホームとして、薬物療法に頼らない、環境を重視した人対人の関わりを大切にしている。 ・その人の言動や行動のあるがままを受け入れ、それを問題行動と捉えないスタッフと共に生活することで、入居者にとって居心地の良い場所になることを心掛けている。 ・ピック病の方たちと関わってきた経験を活かして、ピック病の症状を持つ人の家族や、施設関係の方からの相談や見学に随時応じるようにしている。

<p>認知症の医療と介護に関して全国的に知名度の高い母体法人の理事長・院長が「ピック病の人が普通の生活を続けていける実践」のために、平成13年3月にグループホームを開設した。外部評価が始まって平成17年3月に初めて訪問させてもらった時、その2年前のホームの様子を映したビデオを見ながら当時の管理者は「病院からホームに移って来た利用者は、薬物療法で行動を抑制されていたが、私たちの人間としての尊厳を大切に、人間らしい生活をしてもらおうと人間回復を目指した結果が今の状況です」と語った。その時の管理者の表情は今でも忘れられない。それが11年経過した今回の訪問でも2代目の管理者はそのピック病の人へのケアを引き継ぎ、利用者の「我が道を行く」という行動を抑止することなく『つき過ぎず、離れ過ぎず』のケアを実践して、利用者は安心して生活していた。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	その人のあるがままを受け入れ、共感することを基本にして、ピック病特有の自由奔放な行動や言動を、スタッフ一人一人が理解し、「つき過ぎず、離れ過ぎず」を実践している。	このホームで長く生活していた利用者は、歌を唄いながら表情豊かにホームの中を歩いていた人、自分の歩幅に合わせた数をかぞえて歩いた人が、今はその兆候はなくなり静かに生活するようになっていた。しかし、眼の輝きは残っており、このホームの介護力による生きる力はまだ残っていた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	立地の関係上、地域の中に溶け込んでいるとは言いがたいが、それでも入居者と戸外へ散歩に出かけた時に、地域の方や近隣施設の利用者さんと自然な挨拶を交わすことを地域交流のひとつとして行っている。ここ数年で定着してきたと思われる納涼祭も、地域交流の一つと感じている。	このホームも地域との付き合いは大切にして色々な趣向で努力はしていると認めている。しかし、利用者本人の生きる力はこのホームの職員と家族の力によるものだと思う。ピック病という特殊性から、両者の切れ目のない愛情が及ぼす影響力が一番高いと思う。他県からの見学や他ホームからの相談もある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ピック病という病気の理解と、症状に対する介護方法を、見学や運営推進会議の勉強会などを通じて提供させていただいている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回開催している運営推進会議は、近隣の3つのグループホームと合同で行い、有識者の方および他施設の職員と意見交換をすることで、活動意欲を高めるよう努力している。また、それぞれのホームの特徴が垣間見られるので、合同での会議を開催に意義を感している。	地域密着型のグループホームとしては運営推進会議を開催して、地域の人、行政の中でその活動の状況を理解や協力してもらうことは当然である。最も大切なことは、ピック病で悩む本人や家族の立場を行政や地域の場で、支援と協力の輪を広く認識していく場があって欲しい。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	笠岡市には、当事業所の運営の趣旨を理解していただいております。信頼関係もできてきていると感じています。また、運営推進会議などを利用して情報交換を密に行い、わからないことや質問・疑問があれば、いつでも連絡が取れる関係を築いている。	利用者はピック病という生活に困難な面も高く、この病で生活をしていくための専門の施設は全国で唯一の存在である。笠岡市の住民は3名、他の6名は他の府県であり、市の指導と協力が必要である。	ピック病の人がグループホームの中で生活している例はあるが、このホームの利用者のように「我が道を行く」行動で、のびのびと自由に歩き廻っている姿を見たことがない。このような行動が出来るのは、専門のホームであるが故かもしれないが他の地方でも是非検討してもらいたいと願う。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	特にこのピック病という認知症の方には、身体拘束を行うことでは何も生まれないことを職員一人一人が身をもって体験し、理解している。どのような行為が拘束にあたるのかを都度考え、意見交換を行いながら身体拘束をしないケアを実践している。	人間として一番重要な前方連合野や辺縁系への抑制がはずれた状態で行動が「我が道を行く」という本能のおもむくまとなり、時には危険の恐れも出現する。叱咤の抑制措置は必要となろうが、日常の職員と利用者の信頼関係を大切にしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	昨今特にメディアに取り上げられている高齢者虐待については、運営推進会議の場でも勉強会を開いたり、職員間で話題にあげたりすることで、常に意識してケアを行っている。また、面会や見学など来所しやすい雰囲気を作ることで、外部の目を入れるように心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	関連する書物、資料を準備し、いつでも閲覧可能なように整えている。活用する機会はまだ無いが、知識として集めていきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	必要な書類を提示、配布し説明を行っている。利用途中に行われる介護報酬の改定や加算の増減などの利用料に関することは、文書だけの同意でなく、口頭での説明を行って納得していただいている。また、不明な点や質問をいつでも受け付けられる環境を整えている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者、家族等の意見や要望の大切さを理解し、家族の面会時には積極的にコンタクトを取り、話がしやすいような雰囲気を整えている。その際、本人の今の状態を包み隠さず報告しており、内容をすぐ記録に残して、職員全員が家族の思いを周知して、サービスにつなげるよう努力している。	家族との関係維持を大切にしており、日常の連絡、そして家族の訪問は密になっている。特に、利用者の日常の生活上の問題点の把握など分析を最重点におき、その解決のための課題抽出とケア実施内容の立案、実施した結果の評価等のケアマネジメントの様子を家族に毎月報告してより綿密な関係を維持している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	勤務時間の合間に感想や提案等、意見交換する機会を作り、運営に取り入れている。また、連絡ノートや介護記録などを通じて、管理者がスタッフの思いをくみ取り、個別に意見を聴く機会を設けている。	このホームの職員はピック病の症候を理解し、日常生活の中でその人の変化に気づき、その変態への思考を高め、対応能力(失語におけるコミュニケーション)等の能力が問われており、全員で話し合いながら意欲を高めている姿には敬服する。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者が、法人管理職との情報交換を都度行っており、職員の意見や要望を伝える機会を設けている。また、自ら考えて行動できる環境を整え、いつでも相談できるような信頼関係を築き、働き甲斐のある職場作りに努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人による社内研修、勉強会および社外研修に参加し、ケアの向上に努めている。また母体である病院職員とのコミュニケーションをとることによって、実践的な知識の取得(特に医療面)に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	国内・外を問わず活躍する代表者によって、同業他社の方との交流の機会があり、サービスの質の向上へとつながっている。管理者は、2か月に1回開催されるきのこグループのグループホーム部会に参加し、情報及び意見交換を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	失語もあり、自ら意思伝達することが難しいので、スタッフが本人さんの思いをくみ取り、「ここに居てもいいんだ」と思っていただけに関わっている。また、環境面では使い慣れた物、思い出の品物を入れてもらっている。担当スタッフが決められ、そのスタッフ中心でケアを展開する。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	最初から全ての情報を把握するというよりも、入居後の面会や電話などを利用して、徐々に信頼関係を築いていき、何でも話せる環境づくりに取り組んでいる。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	事前に知っている情報だけに頼るのではなく、入居後に家族の方から得られた情報や本人さんの今の状態を都度記録に残して、即座にスタッフ全員で共有できるようにしている。そして、担当スタッフが中心となり、入居者にとってしやすい環境が提供できるように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	その人らしさを忘れず、常に尊敬の念を持って接し、相手の立場を思いやり、同じ暮らし人としての関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人にとって家族はかけがえのない存在であり、家族との距離を常に考え、家族の思い、意見、希望を含めたケアを提供している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地元から遠く離れて生活している方が多いので、なかなか難しい面がある。それでも、面会しやすい雰囲気を整えたり、外出・外泊できる支援を行うように努めている。また、この場所が第二の“ふるさと”として認知していただけるよう努力している。	毎日朝夕訪れるご主人、最低月1回は訪問してくれる家族はもちろんであるが、このホームの7人の職員達が、このホームの利用者にとってはかけがえのない信頼できる間柄がある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ピック病の特性として「我、関せず」と他入居者に関心を示されるとい方が少なく、会話が絶えないという雰囲気は見られないが、馴染みの人が側にいるだけで安心する関係環境に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	協力病院への入院や在宅復帰という形でサービス利用の終了を迎えても、電話などを通じて、その後の経過を把握して、相談援助に努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の意向をうかがえない方が多い中、担当するスタッフを中心として意見を集め、日々の暮らしの中からその人らしさが一番輝くケアを提供していけるように努めている。	ピック病の変容として「我が道を行く」行動や「自発性の低下」等があり、「失語」等が出現してくるので思いや意向を知ることは難しい。職員は日常生活状況から生活・身体・精神機能の変化に気付く努力をしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族の方の面会時や電話での会話の中で、本人に関する話をうかがい、都度介護記録に残すことで情報を共有している。その情報をもとに、その方の可能性を引き出せるような支援に取り組んでいる。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	介護記録では、毎日のバイタルやスタッフ自身の意見・感想を記入するようにすることで、スタッフ全員がいつでも意見および情報交換出来るようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	1ヶ月毎の独自のケアプランを使用し、より一層今の状態に応じたケアプランを提供している。入居者本人が、本来持っている良いところに常に目を向けたケアプランの作成に取り組んでいきたい。	利用者の担当職員を定めており、毎月「今月注目したこと」「それに対する介護」を定める。そして1ヶ月後「変化又は維持されたこと」を話し合う。そして「来月に向けて」と定める。これがこのホームのケアプラン、モニタリング、カンファレンスとなり単純明瞭なケアマネジメントに職員同士のコンセンサスがあり、家族へも毎月送り「利用者の状況がよく分かる」と喜ばれている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	入居者一人ひとりの記録に、スタッフの意見、気づきや思いを書くことで情報を共有でき、より良いケアへつながるように取り組んでいる。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の方が遠方に住んでいる方が殆んどのため、スタッフ全員で協力して、美容院、買物、ドライブ等、本人の希望に沿った取り組みを続けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	公的な機関、美容院など限られた資源しか把握できていないため、今後は地域資源を活用しつつ開発もしていきたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	同一敷地内にある病院において、常に必要な医療が受けられるよう情報を共有しており、より入居者の希望や要望に応えられるよう支援している。	主治医は母体病院の副院長であり、疾病の治療、1ヶ月に1回健康管理検査、6ヶ月に1回健康診断、年一回脳の画像検査をしてくれるので、利用者と家族は安心している。外科等の病気に対しては副院長が他病院を紹介してくれる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日々の状況を把握し、昼夜問わず母体となっている病院看護師との連携強化を行うことで、より広い視野を持って入居者の生活を支えている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	介護記録に入院中の様子を綴り、現在の様子を把握することに努めている。その後の退院に備え、スムーズにグループホームで暮らせるよう、病院関係者と連絡を密にとるよう努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化によってピック病特有の症状が軽減され、医療面のサポートが不可欠になった場合のことを考え、事前に主治医・本人・家族と話し合いを行うことにしている。その後も、随時連絡を取れるような体制を構築している。	全国でピック病を発症した人の家族は在宅介護するのが困難となり、母体病院で診療をしてもらう人も多いと聞く。地域柄関西以西の人が多いが、病院に入院している人の状態を見て、グループホームで生活可能の人が選ばれ入所してきた人ばかりなので、重症化して病院での治療が必要になれば病院に移るケースもある。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時のマニュアルを作成し、いつでも見る事が出来るようにしている。急変時には、同一敷地内にある病院と連携が取れる状況を構築している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	緊急時のマニュアルを作成、避難訓練の実施と災害に対して対策、訓練に備えている。近隣グループホームと連携を図り、より実践に即した訓練を行っている。	病院、老健施設、ケアホーム等の施設があり、グループホームも4事業所が集中配置された団地となっているので、施設全体とグループホーム同士の合同消火、避難訓練をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	スタッフ同士の発言、入居者への声かけや対応をプライバシー保護の観点から常に考えられるよう、お互いにチェックできる環境づくりに取り組んでいる。	ピック病の症候による一人ひとりの行動を尊重して「つき過ぎず、離れ過ぎず」のケアをしているが、その間に「できる限り集中力を高める」ために、ソフトボールでの「キャッチボール」や「ぬり絵」「ジグソーパズル」「間違い探し」「歌を唄う」等の脳トレをしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ピック病の特性上、思いや希望を十分表現する事が出来ない入居者の思いをいかに叶えていけるか、スタッフ、家族の協力のもと、総合的に取り組んでいる。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者それぞれの生活パターンを把握し、気持ち良く過ごせる事を第一としている。その日の状況によって、離床を早めたり、遅くしたりと柔軟に対応できるように、色々と取り組んでいる。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	髪型や髭剃りなどの整容、その方に合った衣類など、入居者一人ひとりが个性的で、お洒落な装いが出来るように、家族の方の協力を得て支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理中の様子を五感で感じていただけるよう、リビングでの過ごし方を工夫している。食事中は、互いの顔が見れる空間で、スタッフも一緒に楽しく快適に食事が出来るように取り組んでいる。	食事は当番職員が調理をして、食べやすく、呑み込みやすく、おいしい食事を提供している。嚥下能力に応じ、食べ物の大きさ、刻み、ミキサーで形状を調整し、水分はゼリー状にする等調整している。全員楽しそうにおいしく摂食していた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	入居者一人ひとりの方に応じた水分量を守り、一日の間でしっかりと補給できるように取り組んでいる。また、個々に応じた食事形態や提供の仕方を工夫しており、食思の変化を見逃さないよう、すぐ記録に残して対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	朝と寝る前を中心に、入居者一人一人に応じた口腔ケアを行っている。現在1名の入居者が訪問歯科による口腔ケアを定期的に行っており、歯科医による専門的なアドバイスも受けやすくなっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	チェック表に記入することで、入居者一人ひとりの排泄パターンを、スタッフ全員で把握している。また、トイレ誘導時に便座に座る習慣をつけることで、トイレで自然な排泄ができるよう取り組んでいる。	トイレは各個室に設置してあるので、排泄パターンにより誘導して便器で排泄するようにしている。水分摂取量と下剤コントロールで排便コントロールもしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	繊維質の多い野菜やブルージュースを摂取していただくよう工夫している。また、入居者一人ひとりに応じた適度な運動や必要最低限の下剤の服用で便秘解消の取り組みを行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入居者一人ひとりに応じてゆっくりと寛いで入浴できる事を目指し、時間に余裕を持った支援をしている。入浴時も歌を歌ったり、声掛けをしたりといった関わりを大切にしている。	入浴は本人の希望も尊重して行い、入浴の楽しさ、気分高揚を高める効果を生んでいる。又入浴の時こそ職員とのコミュニケーションが図れる絶好の機会としている。ピック病で失語はあっても相手の言葉は理解できる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中しっかりと体を動かし、適度な昼寝の時間を設けることで生活のリズムを整えて、夜間の安眠および休息を支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	スタッフの方で薬の管理、使用を徹底している。関係機関と連携を図り、症状の変化によって減薬、処方薬の見直し等をみんなで考え、主治医および看護師に相談している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	外出やドライブが好きな方と一緒に掛ける、歌の好きな方と一緒に歌を歌う等、それぞれの方と楽しみに合わせたケアに取り組んでいる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	入居者に応じて散歩、車椅子での外出、買物、外食など本人と出来る事を考え取り組めるように支援している。また、面会時など家族の協力を得て、ドライブや散歩などの外出支援を行っている。	季節が良くなれば、日中歌を唄いながら散歩をする人もいる。家族が利用者と外出や外食、外泊に連れ出してくれる人もいる。こんな時は利用者の表情もよくなり楽しそうな時間を過ごすことができる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者のお金の使用については、スタッフで管理させてもらっている。使用した分は出納帳に記入し、約一ヶ月分のコピーを家族へ送る等して管理している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族への手紙を一緒に書いたり、返事の手紙と一緒に見たり、家族の方から掛かってきた電話を本人にも出してもらう。こちらから電話を掛けたり、手紙を書いたりして、家族や大切な人とのつながりを支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ピック病の方はよく歩かれるという特徴があるので、廊下や居間など障害物を出来るだけなくし、移動や歩きやすい空間を確保している。また、観葉植物などをさりげなく配置して、生活に安心感を与えられるよう配慮している。	建物はスウェーデンから直輸入した重厚で広めの空間を持つ建物である。リビングルームと廊下はゆったりとしており、テーブルと椅子、ソファが各所に配置されている。小さいテーブルと椅子が移動しやすく多く配置され、利用者が安全に歩くスペースが獲得されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間には周りの雰囲気合わせたテーブル、椅子を配置し、ほぼ決まった席に馴染みの方々と一緒に過ごせるように工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	昔から使っていた物、写真、音楽等、本人や家族の方々が落ち着いて過ごせる環境に取り組んでいる。各居室にトイレが備わり、ゆったりと排泄できる環境を提供している。	広いスペースの中にベットと収納庫、トイレと洗面台を備えている。家族の協力で本人の希望に叶う家具、備品や装飾品、衣装を準備してもらっている。男女共個性が発揮できる服装をしてもらえるようにしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	可能な限り歩けるよう介助する為、人がすれ違えるほどの廊下の広さを確保している。長時間同じ姿勢にならない為に違う硬さの椅子を用意し、椅子を変える等して離床の時間を長くしている。		